

# 国立公園とインタープリテーション

Interpretation in National Parks

古瀬 浩史\*

Koji FURUSE

## 1. はじめに

「アメリカが生み出したベストアイデア」と評されることもある国立公園という概念<sup>1)</sup>。日本を始めとして140カ国以上の国に急速に普及したことをみると、重要なアイデアであったことは間違いない。国立公園が保全や利用の目的において高度に役割を果たすためには、制度だけではなくマネジメントが重要であり、その中でも特に大切なものの一つがインタープリテーションであろう。

アメリカの国立公園を訪れると、それほど旅慣れていない日本人の観光客にとっても困らないレベルで、分かりやすく合理的に情報提供がされていることに気づく。ゲートで配布されるパンフレット、総合的な情報センターであるビジターセンター、ビジターセンターに隣接したネイチャー・トレイル、トレイル脇の野外解説板、ガイド・プログラムなど、いろいろなメディアが連携し、補完し合いながら必要十分な利用情報や、その公園の重要性を来訪者に伝えている。「インタープリテーション」は、国立公園の文脈でみた場合、これらのような公園のマネジメントの一環で行なわれる来訪者と公園管理者の間の教育的なコミュニケーションと位置づけることができる。あるいは公園に限らず、自然環境や文化的な遺産の価値や成り立ちを解釈し、ガイドや展示などを用いて人に伝える行為をインタープリテーション（より正確には environmental interpretation, heritage interpretation）と言い、それを行う人はインタープリターと呼ばれている。

本項では、国立公園におけるインタープリテーションに焦点を当て、まずアメリカの、次に日本の国立公園における歴史的な経緯を概説する。また後半に日本における現状や課題について触れる。

## 2. インタープリテーションの発祥

カリフォルニア州にあるヨセミテ国立公園は設立時に州立公園であったため、国立公園として「世界初」の座はイエローストーンに譲っているものの、実質的には初めて国立公園の考え方を実現した場所だとされている<sup>2)</sup>。その利用の中心地であるヨセミテ渓谷の一角に「パーク・インタープリテーション」の発祥を記念した銅板の碑がある（写



写真-1 インタープリテーションの発祥を記念した碑文

真-1)。そこには、初代国立公園局長のスティープン T. マーサーが、ヨーロッパの山岳ガイドの事例に見習った「ネイチャー・ガイド」のプログラムをヨセミテに導入し、それが今日のパーク・レンジャーによるインタープリテーションの礎となったことが記述されている。この事例を含め、国立公園制度が誕生した前後には、自然を解釈し伝える活動の萌芽が、いろいろな形であったのであろう。

国立公園の制度の確立に大きな貢献をしたナチュラリストとして知られるジョン・ミュアは、「interpret」という言葉を、現在国立公園において使われている「インタープリテーション」の意味に近い文脈で初めて使ったと言われている<sup>3)</sup>。伝記によるとジョン・ミュアは決して雄弁な人物ではなかったようだが、ヨセミテの保護のために多くの執筆や講演を行い、それらが世論を動かし、公園の制定につながった<sup>4)</sup>。その意味ではミュア自身が優れたインタープリターであったのであろう。ミュアと並んで、インタープリターの祖としてしばしば紹介されるナチュラリストにイーノス・ミルズがいる。ミルズは、ロッキー山脈で活動したナチュラリストであり、ネイチャー・ガイドであった。ミュアと同様に多くの本の執筆や講演、ガイド活動、ガイドのトレーニングなどを通じてロッキーマウンテン国立公園の制定に貢献した<sup>5), 6)</sup>。

インタープリテーションの発祥をたどると、初期の活動がいずれも行政サービスとしてではなく民間の活動として

\*帝京科学大学生命環境学部アニマルサイエンス学科

行なわれていたことは興味深い。これは、後述する日本でのインタープリテーションにも共通している。

### 3. アメリカの国立公園におけるインタープリテーションの発展

アメリカの国立公園におけるインタープリテーションの歴史は、マッキントッシュ（1986）による資料「Interpretation in the National Park Service: A Historical Perspective」<sup>3)</sup>に詳しい。同資料によると、最初の国立公園が制定された1872年以降、先進的な公園においていろいろなスタイルのインタープリテーションが試みられ、国立公園局が発足する1916年ころにはすでに、トークやガイド、展示、ネイチャー・トレイル、パンフレットなど、現在の公園で一般的なメディアがひと通り誕生していたようである。インタープリテーションの担当職員は当時「ナチュラリスト」と呼ばれており、最初は季節雇用であったが、徐々に常勤の職員として採用されるようになった。1925年には国立公園局の中に、造園（landscape architecture）部門、エンジニアリング部門と同等に並ぶ部門として教育部門が設定されている。このような仕組みにより、インタープリテーションは国立公園のマネージメントにおいて重要な位置を占めるようになった。

アメリカにおけるインタープリテーションの発展において、特に重要であったと思われる項目を、マッキントッシュの資料から拾うと、1. 歴史分野のインタープリテーションの開発、2. インタープリターのトレーニング、3. ビジターセンター、4. 環境教育の取り組み、などがあげられる。これらのうち、本稿では特に日本への影響が大きかったと思われる、3と4について概要を紹介する。

ビジターセンターが普及する以前、インタープリテーションに関連した施設としては公園の資源に関する展示を行う「公園博物館（park museum）」があった（1930年代の末にはすでに76の公園博物館が作られていた）。1957年から1966年の10年間、アメリカ国立公園局設立50周年を記念して、公園施設やプログラムを充実させる施策「ミッション66」が実施され、この期間に多くのビジターセンターが作られた（ミッション66以前は3つのビジターセンターしかなかったが1975年には281ヶ所が作られていた）。公園博物館が展示物とその説明を中心としていたのに対し、ビジターセンターは公園利用に関する情報の提供や、来訪者の関心を引きつけることを重視し、多目的な活動を行う施設として位置づけられた。

国立公園のインタープリテーションの中に環境教育が明確に位置づけられたのは1960年代後半から1970年代にかけてのことであった。国立公園局は、学校向けの教材「NEED（National Environmental Education Development）」を開発し、さらにNEEDを実施する環



写真-2 ビジターセンター（グランドキャニオン国立公園）

境教育のためのエリア「ESAs（Environmental Study Areas）」を設置するなど、インタープリテーションに環境教育を織り込む施策を積極的に推進した。ただこのような取り組みに対しては、歴史公園などからは反発も少なからずあったようである。

筆者は、国立公園局OBのジェリー・シモダ氏（日系人として初めて公園長やインタープリターのトレーニングセンターにおいてトレーナーを務めた経歴を持つ）に、「インタープリテーションは環境教育なのか？」と尋ねたことがある。その時、シモダ氏は、言葉を選びながら「インタープリターが環境教育をまったく行っていないとしたなら、その人は何も仕事をしていないことになる」と述べた。この言葉が示すように現在も環境教育がインタープリテーションの重要な要素であることは間違いない。

マッキントッシュの資料には、この他に戦時下の社会情勢が国立公園のインタープリテーションにどのような影響を与えたかなどについても記述がある。歴史的な経緯をみると、インタープリテーションが、様々な試行錯誤によって形成されてきたこと、現在も変化し続けているものであることがわかる。

近年のインタープリテーションに関する動向において、非常に重要だと感じられるものに、「包括的なインタープリテーション計画」がある。公園ごとのインタープリテーション計画は以前から存在していたが、基本的な計画と年間計画が別々に立てられていたり、展示や施設の計画と、ガイド・プログラムの計画が、それぞれ別に立案されているなど、整理が不十分な点があった。アメリカ国立公園局は2000年に「包括的なインタープリテーション計画」と題する文書を発行し、年間計画および中長期計画、展示や出版物等のノン・パーソナル・インタープリテーション（人が直接実施しないインタープリテーション）、ガイド・プログラムなどのパーソナル・インタープリテーション等、様々なメディアを包括的に扱う計画のガイドラインを示し

た<sup>7)</sup>。この中には、計画に含まれるべき要素として、公園の重要性、テーマ、目的、来訪者が体験すべきこと、来訪者分析などの基本的な項目が整理されている。このガイドラインにより、各公園がほぼ共通したフォーマットでインタープリテーションの全体計画を立案するようになっている。またこのようなインタープリテーション計画の手法は、国立公園だけでなく州立公園や、他国の公園、植物園や博物館などの教育的施設に幅広く波及している。

## 5. 日本のインタープリテーションの始まりと広がり

アメリカにおけるインタープリテーションの発祥がそうであったように、日本におけるインタープリテーションの始まりも、民間の活動の中に萌芽を見出すことができる。公益財団法人日本野鳥の会（1934年「日本野鳥之会」として設立）が取り組んできた探鳥会、公益財団法人日本自然保護協会（1949年「尾瀬保存期成同盟」として設立）による自然観察会の普及（自然観察指導員制度は1978年に創設）などはその例といえる。公的な職としては、1948年に厚生省に設置された国立公園部に配属された国立公園管理官の活動がそのルーツの一つと言えよう<sup>8)</sup>。自治体による事業としては、富山県が1974年に創設した富山県自然解説員（ナチュラリスト）の制度がもっとも古いもの一つとされている<sup>9)</sup>。

一方、ビジターセンター、あるいはネイチャーセンターのような名称で呼ばれる自然公園の拠点施設の設置は、比較的早く始まっている。日本で最初のビジターセンターは1963年に日光湯元と尾瀬に作られている<sup>10)</sup>。この時期は、アメリカでビジターセンターの普及が始まってから数年しか経過しておらず、当時の新しいコンセプトをいち早く導入したことがうかがえる。日本の初期のビジターセンターはインタープリテーションを専門とする職員が配置されており、博物展示の施設としての色彩が強かった。このため、総合的なインタープリテーション拠点としての機能を持つまでには至っていなかった<sup>11)</sup>。

1970年代中頃、地域の自然保護運動の帰結として、環境保全地区が指定され、そこに教育普及のための施設が作られる例がみられた。例えば千葉県市川市の水鳥の飛来地、新浜には行徳野鳥観察舎が作られた。保護運動に関わった市民が観察舎運営に参画し、現在に至るまで野鳥観察会などを継続的に行っている。1981年に北海道苫小牧市に設立された日本野鳥の会のウトナイ湖サンクチュアリ（同会サンクチュアリ事業の第1号）には、常勤のレンジャーが配置され、教育普及業務が取り組まれた。ビジターセンターの事例としては、1982年明治の森高尾国定公園の高尾山頂にある東京都高尾ビジターセンターに、日本自然保護協会から解説員が派遣され、常勤のインタープリターの活動が始まっている。これらの拠点でのインタープリテーショ

ンは、各団体等が独自に持つノウハウを基にしながら、資料から断片的に得られる海外の情報を参考にするなど、現場職員の試行錯誤によって行なわれていた。以降、自然公園拠点において、インタープリテーションを担当する職員が常駐するケースは徐々に増えていった。

1991年、環境庁（当時）は全国の自然公園施設（自然ふれあい施設）で自然解説等を担当する人材の能力向上等に関する検討会を設け、インタープリターの養成について検討を開始した。この検討を元に1992年度より「自然解説指導者研修会」が開催された。研修プログラムは3日ないし4日間の合宿形式で、全国の自然公園施設から参加者が集まった。この研修会は2008年まで継続され、日本におけるインタープリテーションの普及や向上、状況の把握に大きく貢献したと考えられる。

## 6. 課題と展望

最後に、現在の日本の国立公園におけるインタープリテーションの課題や展望について述べる。

冒頭に述べたように、インタープリテーションは国立公園の目的を達成するために不可欠な活動であると考えられる。日本のインタープリテーションはこれまで着実に発展してきたが、社会的評価は現在も必ずしも高いとは言えず、課題も多い。例えば、インタープリターの雇用が非常勤雇用や季節雇用である例は多く、経験を積んだ人材が経済的理由によって活動を継続できない場合がある。また、建設から時間が経過し老朽化に向かっているビジターセンターの中には、廃止や統合される例、廃止されないまでも本来の機能を失い、他の目的に転用されている例もみられる。理由は、それぞれのケースによって異なっていると思われるが、施設の計画、設計、施工、運営、評価の中に何かしら問題があった可能性がある。国立公園におけるビジターセンターの本来の意義や、それぞれの施設がこれまでの活動で果たしてきた役割を考えた時、このような状況は極めて残念と言わざるをえない。

インタープリテーションが、今後も国立公園の価値を高めることに貢献するために、必要と考えられる取り組みを挙げる。

### （1）インタープリテーション計画の普及

ビジターセンター等におけるインタープリテーションが、予算に見合った効果を上げるためには、単なる事業計画ではなく、必要要素を包括的に検討した全体計画の策定が不可欠だと考える。この中には、各公園における重要資源の整理（固有の景観や生物資源など）、公園ごとの解説テーマ設定、展示やガイドなど様々なメディアを含んだ関連性のある計画、中長期計画、来訪者分析などの要素が含まれる。

自然公園施設の計画や設計に関しては環境省によって詳

細な技術指針が示されている<sup>12)</sup>、その中には「自然解説（体験）活動プログラム」などの運営に関しても若干の記述があるが、ハード面に比べるととても少ない。インタープリテーションに関して何らかの基準や指針を作ることは、適正な評価のためにも必要であろう。計画担当者向けのインタープリテーション計画ハンドブックのような資料が有効かもしれない。

### （2）今日的な教育の枠組の中に位置づける

インタープリテーションは時代とともに変化してきた。扱われるテーマには普遍的な事柄もあるが、社会で必要とされている教育の課題との関連を常に意識することも大切であろう。例えば、生物多様性条約に基づく国家戦略の中には、教育普及の場として国立公園が想定されている。このような状況を意識したインタープリテーション計画が作られる必要がある。ESD（持続可能な開発のための教育）についても同じことが言える。

### （3）交流、連携の推進

日本では、インタープリテーション拠点施設の設置主体、また運営主体が拠点ごとに異なっているため、交流や連携は行いにくい状況にある。ニューズレターの交換などは行われているが、人的な交流や研究目的の集会などは、一部の意識の高い人達が自主的に行うに留まっている。全体的なレベルを高めるためにはインタープリテーションに関わる人達の、交流、連携を促進する必要がある。

施設間の連携以外には、地域の教育機関、研究機関との連携などが考えられる。自然資源の調査、来訪者分析、プログラムの開発、インタープリテーション計画の立案など、教育機関や研究機関との連携が期待される場面は多い。一方、大学等においても地域連携は重要なキーワードになっており、双方にプラスをもたらす連携の機会は十分に想定できる。

### （4）エコツアーなど受益者負担プログラムの振興

施設の廃止や予算の削減は、必ずしも公園施設に限ったことではなく、公立施設の全体的な見直しの中で行なわれている。そのような中で考えられる対策の一つは、プログラムを一部有料化し、受益者負担で行う方法である。オーストラリアの国立公園などにおいては、民間によるエコツアーが公園のインタープリテーションを担っている場合がある。このような地域では、公園当局は直接インタープリテーションを行うのではなく、エコツーリズムの振興や人材育成の役割を担っている。日本でもすでに、国の施設を含む複数の施設で、有料プログラムが試みられている。有料化ですべてが解決するわけではないが、増えない予算の中でプログラムを維持する一つの方法だと考えられる。

## 7. おわりに

1991年に行なわれた環境庁（当時）によるインタープリテーションに関する検討会の際、全国で活動している専門のインタープリターの数が話題になり、せいぜい100人くらいではないかと話したことを記憶している。その頃に比べれば日本のインタープリテーションの量や質は間違いなく向上している。

新しい国立公園の指定や検討によって注目が高まる今、さらなるインタープリテーションへの関心や理解を獲得し、発展させ、環境教育や自然ふれあい活動の必要性がより増している新しい時代に適合させていくことが求められているように感じる。

## 参考文献

- 1) National Park Service: America's Best Idea Today <<http://www.nps.gov/americasbestidea/>> 2014.8.21 参照
- 2) 加藤峰夫 (2008) : 国立公園の法と制度 : 古今書院, 320pp
- 3) Mackintosh, B. (1986): Interpretation in the National Park Service: A historical perspective <[http://www.nps.gov/history/history/online\\_books/mackintosh2/index.htm](http://www.nps.gov/history/history/online_books/mackintosh2/index.htm)> 2014.8.21 参照
- 4) 加藤則芳 (1995) : 森の聖者 自然保護の父 ジョン ミューア : 山と溪谷社
- 5) Mills, E. A. (1920): Adventures of a nature guide. New York : Doubleday, Pages & Company, 269pp
- 6) キャサリン・レニエ, マイケル・グロス, ロン・ジマーマン (1992) : 日本環境教育フォーラム監訳 : インタープリテーション入門 : 小学館, 207pp
- 7) National Park Service (2000): Comprehensive Interpretive Planning
- 8) 財団法人自然公園財団編 (2003) : レンジャーの先駆者たち : 財団法人自然公園財団, 429pp
- 9) 富山県 : 富山県自然解説員 (ナチュラリスト) について <[http://www.pref.toyama.jp/cms\\_sec/1709/kj00006578.html](http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1709/kj00006578.html)> 2014.8.21 参照
- 10) 由井正昭 (1983) : ビジターセンターの施設に関する研究 : 千葉大学園芸学部学術報告 31, 19-29
- 11) 環境庁自然保護局施設整備課 (1985) : 1. ビジターセンターの計画 : 自然公園の施設 - ビジターセンター - : 財団法人国立公園協会, 124pp
- 12) 環境省自然環境局自然環境整備担当参事官室 (2013) : 自然公園等施設技術指針